

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

秋季企画展

おもいででできた土地 多磨全生園を紹介

博物館には、全国どこでも普通の価値を取り扱うタイプ、地域ごとに必要なテーマを取り上げるタイプ、その時限りの楽しさを提供するタイプの、3種類があると言われている。

当館はその名の通り、全国のハンセン病療養所共有の施設として設立され、活動しており、全国で普通の価値を取り扱うタイプの博物館と言えるだろう。

その一方で、当館は多磨全生園に隣接し、東村山市や清瀬市といった地元から特に多くの来館者を得ている。全生園の現状に関する質問を受けることも多く、来館



土塁と堀の跡

者からすれば当館と全生園は一体のもの、資料館は全生園のビジュアル・センタースタイル的な施設と見えていくようである。そうであれば、ここに来館者が当館に期待するものの1つが存在することになり、全生園に関心を寄せる地元の人々が満足し、また新たに関心を向けてもらうきっかけを作る活動が、当館には必要ということになるだろう。

つまり、地域ごとに必要なテーマを取り上げるタイプの博物館としての側面も併せ持つことが、同時に求められているのだ。

そこで今回の企画展では、来館者が抱くであろう多磨全生園についての疑問に答え、理解を深めてもらうことを目的とした展示を開催することにした。全生園内のポイントと63カ所選び、「史跡」と「日常生活と医療の場」とに分けて紹介する。

全生園の広大な敷地は、入所者のみなさんが、仲間と共に生きてきた過去の記憶を刻み込み、現在のくらしを営み、自分たちがいなくなった後の将来への望みを込めている場所である。敷地の中を歩くと、そうした想いが詰まった場所ののだと気づかせてくれるポイントに、あちら

軽症独身舎



こちらで出会う。まさに、現地が持つ力に触れる瞬間の連続である。今回の企画展は、この現地が持つ力に触れるための入口を用意するという位置づけになっている。

とはいえ、企画展はあくまでも入口に過ぎない。展示を見た後は、ぜひ現地である全生園へ足を運んでいただきたい。そのため会期中、ガイドツアーも開催する。

過去に園内で生きた人々、今園内にくらす人々の、想いの一端に触れ、その先に、入所者との個人的な人間関係が築かれることを願っている。

●タイトル「想いでできた土地 多磨全生園の記憶・くらし・望みをめぐる」／会期10月5日(土)～12月27日(金)／ガイドツアー予定10月19日(土)・20日(日)11月23日(土)・24日(日)12月14日(土)・15日(日) いずれも午後1時～3時。土曜日と日曜日でコースが異なる。先着30人まで。参加希望の方は、当日1階ロビーへ。

重監房跡地の発掘調査 弁当箱、木椀、下駄等が出土

栗生楽泉園内にある「特別病室」(重監房)跡地の発掘調査が8月6日(火)から約一ヶ月行われ、黒尾学芸課長が調査指導の立場で協力した。調査目的は、来年4月に開館予定の「重監房資料館」内に設置される重監房復元に資する、建築工法や部材、調度品等の具体的情報を得るためであり、所期の目的はほぼ達成された。とくに数種類の錠前が出土し、「特別病室」が監禁施設である物証となった。さらに、各独房の便槽から、収監

された人々に由来する多種多様な遺物が出土した。木製弁当箱、木椀、箸、梅干種の出土は、つとに知られる「重監房」における食事に関する証言に重なる。さらに眼鏡、鉛筆、下駄等、人々が持ち込んだと推定される遺物も出土し、牛乳瓶、食品瓶、整腸剤瓶等の出土は房内で懸命に生き延びようとした証とも推定できる。調査成果の概要は11月末までにまとめられ、その後「重監房資料館」の展示に活かされることになる。

ホセ氏を紹介する山口さん



熱く語った。
まずホセ氏は、自らの生い立ち

カービルに生き、カービルを語る

ホセ・ラミレス氏、数々の想い、葛藤、絆

8月25日(日)の午前中、当館映像ホールにて、米国カービル療養所に入所していたホセ・ラミレス氏をお招きして「カービルに生き・カービルを語る」を開催した(笹川保健協力財団主催、資料館協力)。

50人程集まった聴衆に進行役の山口和子氏(笹川記念保健協力財団)が趣旨説明を行った後、ホセ氏が紹介されて、山口氏の質問に應えるかたちで、ホセ氏は自らの経験と想いを

と家族について、妻マグダレナさんとの出会い、発病からハンセン病と診断されるまでの民間療法や病院での誤診、家族の支えのもとでの闘病生活、霊柩車でのカービルへの長旅について話された。

次いでカービル入所後の医療や生活、そして名誉回復のための闘い、家族への想い等々を語った。

ホセ氏は、カービルの医療について、研究の素晴らしさを認める一方で、研究のモルモットにされた屈辱を人間としての尊厳の喪失体験として説明した。そして多くの入所者が同じ経験をしていた事実を知り、声なき人たちの声になる決心をしたのだという。多くの本を読み、世界中でのハンセン病患者への偏見・差別を学び、その後、ホセ氏はカービルを変えるための運動に着手する。それは、療養所にある古い「規則」破りの行動を重ねることであり、ささやかにみえる実践の一つ一つに大いなる勇気を要した。当然のようにペナルティーがホセ氏に課せられたが、両親の理解もあり、戦い続ける決意は揺るがなかったという。

話題がホセ氏の結婚や家族の支えに移ったときであった。山口氏の機転で、ラミレス氏と固い絆で結ばれたマグダレナさんからの発言が得られた。ホセ氏との結婚をめぐる母親との葛藤、それを乗り越えてきたこと、ホセ氏は自分のために、そして他人のために働くが、今は母もそれを十分に理解しているという語りに会場は感

動と共感の空気に包まれた。また夫婦の間に生まれた二人の子供たちも、現在ホセ氏の「ハンセン病の旅」に同道している。子供たちは、ホセ氏の父親からハンセン病を隠してはいけないことを学び、ホセ氏自身からカービルの歴史、ハンセン病の歴史そして世界中のハンセン病患者の権利獲得のため

フィリピン歴史保存会議で 笹川財団、資料館活動を報告

去る8月18日から25日までの日程で、フィリピン歴史保存会議等への参加のため、金学芸員がマニラに滞在した。到着した翌日に開催されたハンセン病史編纂会議では、各分野の専門家が集まり、事前に準備されていたレジュメをもとに、各自報告後、活発な議論が交わされた。そこでは今後2年間で、初のフィリピンのハンセン病史を編むことが決定された。

3日目、4日目は2日間にわたって歴史保存のための会議が行われた。国立公文書館館長より趣旨説明がなされ、笹川記念保健協力財団の山口和子さんと星野奈央さんが、財団のこれまでの事業や活動についての報告を行った。続いて日本のハンセン病資料館の設立過程と活動内容について、金が約50分報告した。出席者には、フィリピン8カ所の療養所からの回復者や職員、所長もおり、日本の資料館設立が患者運動の流れでなされたことと、その資料の収集につ

に戦う父親の仕事について知ったのだという。ホセ夫妻は、最後に子供たちの将来のパートナーにもハンセン病を恥やステグマではなく、人権侵害の歴史的事実として理解してほしいと述べた。夫妻の願いは、そのまま私たちが克服すべき課題となる。聴衆はそうした想いを確かに共有したと思う。

いて興味深く聞いて下さっていた。他に公文書館のアーキビスト等、資料保存の専門家による報告などが続き、実際に資料保存を行うにはどうすればよいか等、参加者による質疑が積極的に行われた。

5日目、6日目は昨年、結成された回復者組織であるCLAPの第一回の総会ならびに各療養所関



会議参加者たちで

係者による報告が行われた。患者・回復者が直面している問題の解決に向け、CLAPの定款の草案作りが行われ、回復者などから公衆衛生、人権、経済的な自立、歴史、メディア等に関する積極的な意見が出されていた。

最終日にはマニラ近郊のタラにあるハンセン病療養所を訪問した。今や地域のニーズに合わせて一般病院化されており、患者数が減っているフィリピンのハンセン病事情が写し出された。

今、世界で歴史保存と資料館設立の動きが始まっている中で、当館の資料館設立過程やその活動が、一つのモデルとなり、注目されていることが感じられた。そうしたニーズに答えられるような対応も今後、可能な範囲で検討しなければならないと感じた。

総務省が視察に来訪

8月21日午後、総務省行政管理局・厚労省担当の安仲陽一副管理官と同工藤文武主査が資料館に来訪、黒尾学芸課長の案内で展示品を観覧。その後同行の厚労省疾病対策課の谷口課長補佐らと共に全生園に移り施設幹部と懇談した。一行は16時半の夕食時間に合せて、3病棟、やすらぎ病棟、新センターを回り、職員不足の実態を知るため、入所者の食状況や職員の介助状況をつぶさに視察されたが、果してどの程度実情を知ることができたのかと、関係者は注目している。

ハンセン病に関する 親と子のシンポジウム

7月24日、午後に行われる「ハンセン病に関する親と子のシンポジウム」参加に合わせる形で谷垣

一法務大臣とのかしきなおみ厚生労働大臣政務官が納骨堂への献花の後に当館を視察した。語り部平沢保治運営委員の案内で1時間ほど見学。谷垣法相は「ハンセン病に関する問題には、人権問題を考える上での一つの核になるものがある。ハンセン病患者・回復者等に対する偏見や差別の歴史を語り伝えていくことが大事である。人権擁護を主導する法務省として

も、できる支援はしていかななくてはならない。」と述べた。

午後には東村山市中央公民館でシンポジウムが開催された。始めに谷垣法相・のかしき政務官・渡部尚市長らの主催者挨拶、東村山第二中学校合唱部による合唱が行われた。続く第一部では石井則久ハンセン病研究センター長・佐川修多磨全生園入所者自治会会長の基調講演と、多磨全生園でボランティアを行っている中学生4名と渡部市長を加えてのパネルディスカッションが行われた。第二部は



親と子のシンポジウム

ファミリーコンサート、第三部では啓発ビデオ「未来への虹 ぼくのおじさんはハンセン病」が上映された。パネルディスカッションでは「人を見た目で判断しなくなつた」「私たちが快く迎えてくれるか不安に思っていたが入所者がとても優しく受け入れてくれた」「多磨全生園のふれあいコンサートで演奏し、入所者に感想を言ってもらえてうれしかった。ボランティアに参加しようと思った。」と、中学生らが入所者との交流から学んだことや感じたことを発表した。中には「いっしょに全生園

の外で入所者とお散歩をしたい。またみなさんの孫として一日施設で過ごしたい。それが孫を持てなかった患者さんを喜ばせてあげられること。」と入所者へできることを考えて意見を述べた中学生もいた。

中学生らはやすらぎ病棟入室者からお話を聞いて紙芝居を作るなどのボランティア活動を行っているという。その活動の先に、友達や家族のような関係ができれば、入所者にとつては大きな心の癒しになると思う。そしてその中には他では経験できない学びもある。中学生たちが入所者と家族のようなつながりを作り上げることが期待したい。

統一交渉団、田村厚労大臣交渉

要望を踏まえ、最大限頑張る

統一交渉団がかねてから要請していた田村憲久厚生労働大臣との面談が、8月14日午後2時30分より大臣室で実現しました。当日の出席者は全原協・笹会長、堅山事務局長、全療協・本部と支部代表14名、全国弁連・徳田弁護士等8名、江田五月両議懇顧問、ハンセン病問題の最終解決をすすめる国会議員懇談会の玉木雄一郎事務局長他

田村厚労大臣と交渉



関係者多数である。

はじめに笹全原協会長と神全療協会長より、田村大臣に要請書を手渡し、笹氏が代表して挨拶、神氏が要請書の趣旨を説明しました。その後、徳田弁護士、江田両議懇顧問、堅山事務局長からも要請、さらに安倍総理との面談も要請した。田村厚労大臣の回答を要約すると、「今の公務員定員削減計画は今年で終わる。①27年度からの次期定員削減計画は来年度の春頃から検討に入ると思うが皆さんの要望をしっかりと踏まえ、具体的な内容についてもしっかりと準備して行きたい。②26年度の定員については今までの経緯を充分ふまえて対処したい。③賃金職員の即時定員化に向けて長期計画の策定をせよとの要望については、実態に対応できるように最大限の努力をするので、そのためのご意見を頂きたい。④ストライキ（実力行使）をする

前に我々もやるべきことがあると思っています。国会決議は非常に重いわけなので、その決議にある程度沿った結論を出さないと、国会軽視となり理解も得られないと思います。⑤総理との面談という話ですが、総理との面談で解決するのであれば私が頑張る意味はないわけなので、その前に私にちよつと頑張らせて下さい。それで事成らなかつた時には次のステップがあると思います」。

八病医学夏期大学講座

第35回ハンセン病医学夏期大学講座が、8月5日（月）より9日（金）まで、全生園本館2階会議室とハンセン病研究センターで開催された。参加者は東京、横浜、名古屋、群馬、香川、富山の各大学、東北栗生、多磨、長島、星塚の国立ハンセン病療養所職員、看護学生、県関係、病院関係者ら36名で、総合コース、国際医療コース、看護福祉コースに分かれ、各講師より講義実習を受けた。初日15時30分からは入所者9名退所者6名が、参加者と一緒になつて4班に分かれ、交流会もち体験談を語り合った。17時30分からはコミュニケーションセンターで、関係者全員の懇親会が行われた。6日には資料館見学も行われた。

恒例* 多磨全生園納涼祭*

~盛大に開催される~

去る8月8日(木)、恒例の多磨全生園納涼祭が盛会裡に行われた。晴天に恵まれ、午後5時からのお囃子太鼓も賑やかに祭りが始まった。福引きには長い行列ができ、ボランティアの中学生も混じって景品を手渡していた。

会場の旧全生学園グラウンドには飲み物やおもちの屋台が並び、その脇の桜並木にも、焼き鳥や焼きそばなど軽食の屋台が軒を連ねた。夕暮れが迫ると共に屋台に並ぶ人も増え、盆踊り会場を囲むように設けられたイス席には入所者の皆さんの姿も増えてきた。

盆踊りは午後6時から始まり、まずは浴衣をまとった踊り方の皆さんが、続いて近隣から集まった人びとや入所者、来賓、職員も加わり、「東京音頭」「東村山音頭」などに合わせて踊った。夏祭りらしく、可愛らしい浴衣姿の小さな女の子が踊る姿もみられた。

午後6時45分から諸氏の挨拶が始まった。佐川修実行委員長は、地域のみなさんに祭りを楽しんでいただきたいと挨拶し、それに続

いて施設長挨拶として朝戸裕多磨全生園長が、来賓として木原誠二衆議院議員、古川夏樹厚労省医政局国立病院院長、田原克志厚労省疾病対策課長、渡部尚東村山市市長らが次々とマイクを取った。

その後も続々と人が集まり、踊りの輪も大きくなった。午後8時、いよいよ打ち上げ花火が始まり、望郷の丘からグラウンドにかけての通りは人垣で埋まった。色とりどりの花火に、今年も大きな歓声が上がった。少し離れたセンター通りなどから、花火に見入る入所者や職員の皆さんもおられた。

納涼祭が地域の一大イベントであると同時に、やはり入所者の方々にもかけがえない時間であることを感じ、また実行委員の皆様はじめ沢山の方々が集まった人びとをもてなす姿が印象的だった。



子供も一緒に盆踊り

心の叫びと感動を残して
成瀬さん、塔さん安らかに

松丘保養園入所者の成瀬豊さんが5月17日、享年91歳でこの世を去られた。成瀬さんと当館との関係は、二十年前に当館設立の際に油彩画「叫び」を寄贈していただいていた縁で、奥様のテルさんと共に、松丘保養園に学芸員が出向く度にいつも温かく迎えて下さり、様々なご教示をいただいた。いつも穏やかで明るい印象の成瀬さんであったが、作品に写し出される通り、ハンセン病を患っただけで被った理不尽な状況への苦悩や怒りが根底にあったと思われる。成瀬さんの作品は本人が語っていた「人を感動させるにはまず、自分が心ゆさぶられるものでなければならぬ」との言葉と一貫するものであった。

8月30日(金)午後2時30分から、大島青松園協和会館で塔和子さんの告別式が行われた。当日は雨の中、約80人が参列した。

塔さんは非常に有名な詩人で、高見順賞など数多くの賞を受賞した他、19冊もの詩集を編んだ。当館もリニューアルの際には資料提供や作品の展示承諾をいただいた。また二〇一一年には塔和子の会との共催で、「いのちの詩 塔和子展」を開催させていただいた。

寄贈された資料の中には、大量のファンレターがあった。大事に



成瀬さんの油彩画「叫び」

とつてあつた手紙の山に、いかに人恋しかったのかを見た思いがした。病棟入室後も、身のまわりの物や出来事を謳う作風そのままに、看護師さんや訪問客を題材に詩作を続けた。もつと作りたかつたのだらうと思うと、残念でならない。お二人のご冥福をお祈りしたい。

眞宗大谷派
全国交流集会

「人間を忘れない」をメインテーマに掲げ、「第9回眞宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会in東京」が、10月16日(水)から17日(木)にかけて開催される。

16日のテーマは「ハンセン病問題の今と震災・原発」。鎌田慧氏(ノンフィクション作家)による記念講演や、リリーススピーチなどが行われる。会場はハイアットリージェンシー東京(新宿区)。17日のテーマは「耳をすます

そして 語り継ぐ」。多磨全生園を会場として、園内のフィールドワークや沢知恵氏によるピアノの記念コンサートなどが行われ、東京集会宣言が採択される予定。

なお、参加は事前申込制で、申込は10月1日に締切りとなつていく。

コ・メディカル学術集会

第25回ハンセン病コ・メディカル学術集会が、10月4日(金)と5日(土)に多磨全生園で開催される。この集会はハンセン病療養所に勤める医師以外の職員が、勤務中の実体験を1人でまたは数人でまとめた研究発表の場で、13園全てが参加、演題は80以上、演題のまとめに参加した人は延350人を超える。初日には特別講演「駕籠に乗る人担ぐ人 そのまたわらじを作る人」(喜多悦子)と教育講演2件も行われる。

開館20周年記念座談会

延期した開館20周年記念座談会「資料館の設立、活動、これからへの期待を語る」を、改めて予定している。資料館設立や活動を中心的に担われた方々に、当館を振り返り、今後望むことを語り合っていた。日時：11月9日(土)午後1時30分〜3時/場所：当館映像ホール/登壇者：大竹章・佐川修・成田稔・平沢保治・山下道輔の各氏(予定) / 先着150人まで / 詳細についてHP等でご確認の上お越しください。